

第Ⅲ編 房総における縄文中期の石器群について

種 田 齊 吾

1 はじめに

縄文時代の研究において生産活動の復元は、かなり困難な仕事であるが、最も重要で大きな課題である。従来の研究には、貝塚等から検出される食物遺存体のあり方から生産活動を究明しようとする観方、石器骨角器等の生産用具の出土量、機能的な分析から探ろうとする方法があった。そして近年の動向としては、この両者の対応関係よりみていこうとする傾向がみられるようになってきたが、中でも生産活動の実体を究明するためには生産用具としての石器群のあり方を基礎としなければならないことはいうまでもないことであろう。

昭和25年、故藤森栄一氏が、中期におけるいわゆる「原始焼畑陸耕」という新しい生産形態を予想したのは、この石器群のあり方を分析した結果を一要素としての立論であった（藤森1950）。以後、石器の研究は機能分析あるいは集落における石器群のあり方といった石器を社会構造の中に正しく位置づけ、縄文時代が如何なる生産形態であったかという点に努力がはらわれているのである。

ところで、従来の研究は主として中部山岳地帯から関東西部丘陵地帯におけるデータを中心に論じられたものが多かった面がある。これは、この地帯に集落をなす大規模な遺跡群が密集しており、豊富な資料が、そのような研究を可能にしていたからと考えられる。一方、千葉県下では中期から、東京湾周辺にめざましい貝塚の発達が見られ、主として、漁撈活動に関する研究が金子浩昌氏らによって研究されている（金子1959）ものの、石器については、具体的に論じられる機会が少なく、石器の乏しい地域と理解されてきた。しかし、最近、船橋市高根木戸遺跡、松戸市貝の花遺跡、千葉市僧御堂遺跡など、大規模な発掘が実施され一集落内における石器群の様相が把握される重要な報告が提出されてきた。

そこで、本稿では千葉県における中期遺跡の石器群の様相を検討し、山岳地域のあり方と対比することによって、地域的特性を把握したいと思う。なお、資料として取り扱った遺跡は、主として石器の出土量、出土状態、実測図等が記載されているものをえらんでいるので、きわめて不備であると思われるが、今後資料の充実をはかっていきたいと考えている。

2 主要遺跡における石器の出土状態

千葉県における時期別の遺跡数は伊藤和夫氏がまとめた「千葉県石器時代地名表」（昭和34年）をみると、中期の遺跡は前期の約3倍に増加し、後期ではさらに中期の3倍にもなっていることが知られる。

表1 千葉県における遺跡の時期別分布状況

時期 遺跡	早	前	中	後	晩
包含地	31	45	111	207	2
貝塚	53	58	154	435	24
計	84	103	265	642	26

また、貝塚を伴う遺跡と、そうでない包含地と比較すると全時期を通じて貝塚が多く、中期では約60%、後期では70%を貝塚が占めている。すなわち千葉県においては各遺跡で貝塚の規模に大小の差異こそあれ、貝塚の形成がめざましかったことがうかがえるのである。このように遺跡のあり方をみてみると、その生産活動は漁撈が主体を占めていたと理解されるのであるが、石器の出土状態からみると各遺跡でどのような特徴が見出せるであろうか。ここでは主に石器組成、出土量の面から特徴をみていきたいと思う。

遺跡は中期を中心とするものであるが、後期あるいは、晩期まで継続する例が多く個々の石器の時的な所属には不明な点も多い。

以下それらの遺跡をあげてみよう。

1 白井雷貝塚（西村1954）

利根川に注ぐ黒部川溪谷に臨んだ標高44.8mの丘陵上に位置する。貝層部は大小数箇所の斜面貝塚を呈するが、本貝塚はその中の一つである。

人工遺物は土器、石器、骨角器、土製品、貝製品などがある。土器は中期の下小野式、五領ヶ台式、阿玉台式を主体に出土。

石器の出土量は少なく、片面加工打製石斧2、局部磨製石斧1、石鏃1、塊状耳飾り1がある。

2 向油田貝塚（西村1952）

前述した雷貝塚の西側、標高40mの丘陵上に位置する。貝層部は東側斜面と西側斜面の2箇所に構築されている。昭和26年、発掘調査により土器の層位的観察がなされ、その際、混土貝層中から人骨が発見された。

人工遺物は土器、石器、骨角器、貝製品、土製品がある。土器は阿玉台式、勝坂式、加曾利E式である。

石器は打製石斧10、半磨製石斧1、磨製石斧4、石鏃1、敲石1、凹石3、砥石1、有孔石器、石錘2があげられる。なお、この調査では石鏃の出土例はわずか1点であったが、齊木氏の踏査により石鏃20点をはじめ搔器8、ノミ状石器4、石斧3、磨石1などが報告されている。（齊木1970）

本遺跡の特徴としては石鏃が多量に出土していることがあげられる。

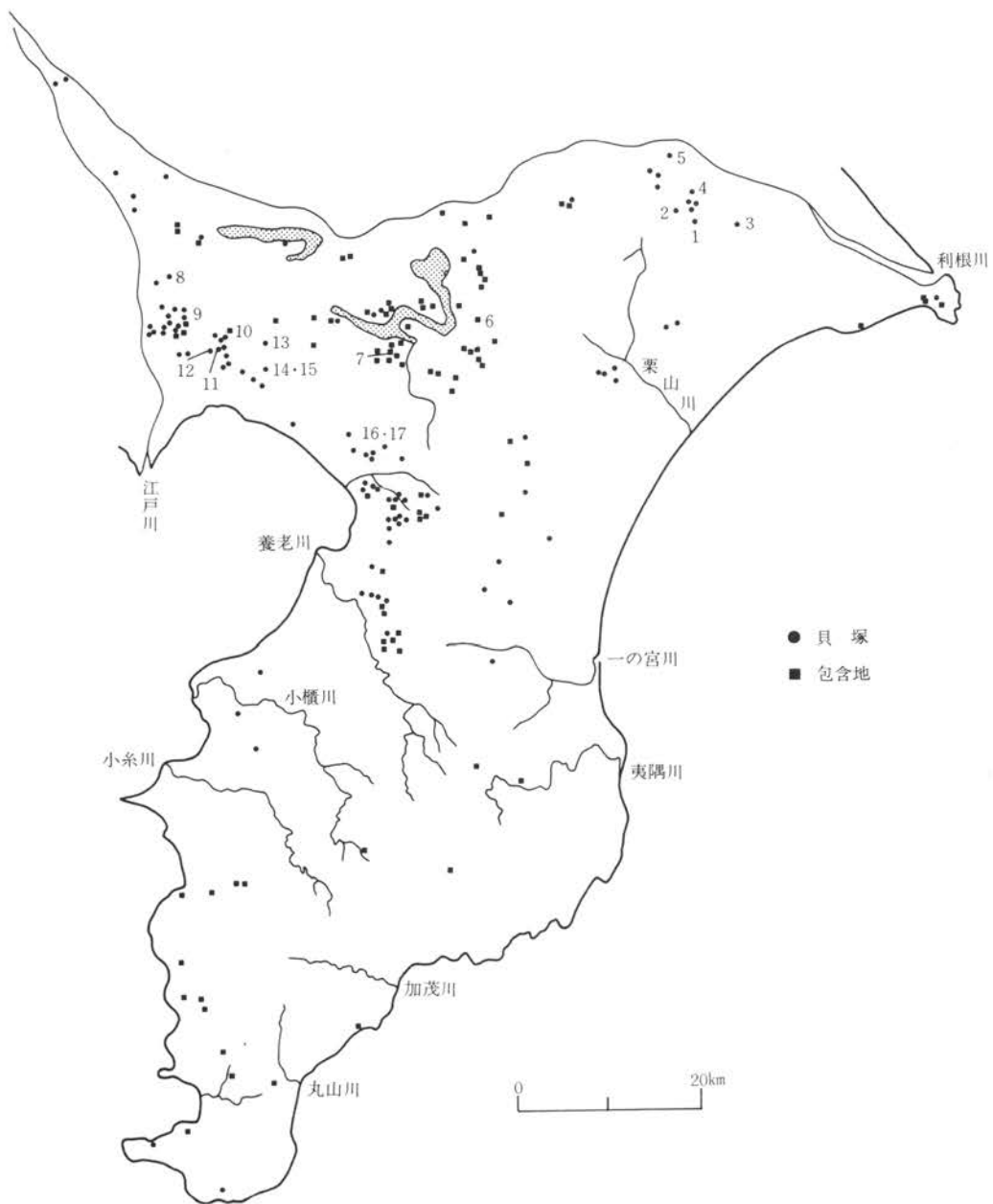


図1 縄文中期遺跡分布図—伊藤氏原図に一部加筆
 (数字は文中の遺跡番号と対応)

3 阿玉台貝塚（西村1970）

黒部川の沖積地から湾入する支谷の奥部丘陵上にあり斜面貝塚を呈する。「阿玉台式土器」の標準遺跡として著名。昭和32年、西村氏によって行なわれた調査では貝層最下部から阿玉台式土器を中心とし、上部からは勝坂的な土器や加曾利E式のものを出土。

人工遺物は土器、石器、骨角器、土製品、貝製品がある。石器の出土量は少なく、打製石斧2、磨製石斧4、石匙1を数える。打製石斧のうち1つは礫核状の石斧で石匙は安山岩の大形粗製のものである。

4 木之内明神貝塚（西村1969）

黒部川溪谷の河口に近い、標高40mの丘陵上に位置する。貝層部は南北斜面の広い分布と西側の点在推積によって馬蹄状を呈する。

昭和33年、西村氏によって北と南斜面の貝層部に対して発掘調査が実施された。トレンチによる面積の狭い発掘であったが遺物の量、種類とも比較的豊富で、特に漁撈具の多いことは本遺跡の生産活動の実体をあらわしているものといえよう。

人工遺物は土器、石器、骨角器、貝製品、土製品などをあげることができる。土器は阿玉台式、加曾利E式を中心に、前期後半から中期全般にわたって出土。石器の出土量が多い。礫器8、打製石斧3、半磨製石斧5、磨製石斧6、石錘3、凹石2、塊状耳飾り1等である。石器組成からみた特徴としては、礫器といわれる、自然礫の一部を打ち欠いて刃部を形成する簡単な加工のものが多く、形の整った石斧の少ない点が注目される。

5 三郎作貝塚（西村1971）

利根川下流の沖積地から3km奥まった丘陵上に位置する。貝層部は2箇所で作られた斜面貝塚である。昭和35年、西村氏によって南貝塚の調査が実施された。

人工遺物は土器、石器、骨角器、貝製品、土製品が認められた。土器は勝坂式、阿玉台式、加曾利E I、E IIが主体で早期の土器も出土。石器としては打製石斧3、半磨製石斧2、磨製石斧3、敲石1、凹石1等で一応中期に所属するものと考えられる。打製石斧は共通して礫器的な粗雑な製作である。

6 中団護台遺跡（江森他1973）

根木名川の一支流である小橋川の奥部支谷に面して形成された舌状台地上に立地、標高は35mをはかる。昭和47年に調査され加曾利E IV 式期の竪穴住居地3軒と土壇5基などが発見された。

人工遺物としては土器、石器、土製品がある。土器は加曾利E IV 式だけに限られる単純な内容を示していた。

石器は非常に貧弱で、無茎の石鏃4と石皿の破片1が出土したのみである。この他報告書には大形石皿1と磨石1のあることが記されている。本遺跡の石器群の特徴としては打製石斧、磨製石斧が1点もみられなかったことで、この時期の他遺跡と較べ著しい相違となっている。

7 生谷境堀遺跡（桑原他1974）

印旛沼に流入する鹿島川と手操川に挟まれて形成された標高30m前後の小規模な舌状台地に立地する。昭和48、49年発掘調査が実施され、加曾利EⅢ式期の住居址3軒が発見された。

人工遺物には、土器、石器、土製品がある。土器は早期撚糸文系の土器をはじめ、後、晩期も出土しているが中心は中期加曾利EⅢ式である。

石器は打製石斧4、磨製石斧4、石鏃7、磨石7、石錐1、スクレイパー2、不定形刃器2、軽石製品などで、この他、住居址内から多量のフレーク（黒曜石、チャート等）が出土している。なお、磨石としているもののうち1点は実測図からみると石皿の破片と思われる。

それらの石器は中期の中でとらえるものであるが、組成の上からみると石鏃の多いことがあげられる。さらに刃器、スクレイパー等の剥片石器の存在も注意される。住居址内から得られたフレイクの量からみて石器製作が行なわれた可能性がある。また、打製石斧の出土量が意外に少ないことも本遺跡の特徴としてあげておきたい。

8 貝の花貝塚（八幡他1973）

奥東京湾の東岸、南に進入する根木内本谷から分岐する通称栗ヶ沢支谷の西縁台地に立地する。直径70～80mの南東に開口する馬蹄形貝塚を伴う遺跡で標高28m、水田面との比高は13mをはかる。昭和39、40年、集落跡の全面調査がなされ、中期末葉（加曾利EⅡ式）～晩期の合計35軒の住居址と土壌10基が確認、直径約90mの馬蹄形の平面をもつ集落跡の全ぼうが明らかにされた。

人工遺物としては土器、石器、土製品、骨角器、貝製品などがある。石器は打製石斧 200以上、磨製石斧約80、石皿片 158、磨石約 250、凹石80、石鏃15、石匙2、石棒片25、石剣32、軽石製石50など多量に出土。これらの石器のうち、打製石斧、磨石、凹石は普遍的に、石棒、石剣は後期の住居址に片寄って発見されている。打製石斧は分銅形が最も多く、中期末～後期への傾向といえようか。磨製石斧は定角式が大半を占めており、長さ5cmにも満たない小形石斧もある。石皿は磨石とともに多く認められたがすべて破損品で、これが磨石に再利用されたものの多いことも指摘されている。石器組成からみると、石鏃の数が他の石器と比較して、いちじるしく少なかったことが注意されよう。この本遺跡の石器群は、一遺跡に展開する各期の集落における組成のあり方を示す好資料となるものである。報告書による各住居址別の出土状況は表2に示すとおりである。

表2 住居址別石器出土表

住居址	打製石斧	磨製石斧	磨石	石皿	砥石	石匙	石劍	凹石	輕石	石棒	石錘
1号	9	1	9	1	4						
2号											
3号	1										
4号	2	1	1		1						
5号	5		1			1					
6号	3	2	3				1				
7号	3	3	1	1				1			
8号	5	6	4	2	5						
9号			4	1				1			
10号			3	1	1		1		1		
11号	4		3		1			4	1	1	
12号	3	4	5	1	3		4		2		
13号	6	1	3	2	1						
14号	2		2	3							
15号	2		2	3	1			2			
16号	2		2	3							
17号	5		1	1	1			5		1	
18号	5	1	3	2	3						
19号				1				2			
20号	1		1						1	1	1
21号	4	1	3	5	2			2	1		
22号	5	2	15	5	3			3	1	1	
23号	1	1			1						
24号	3	1	3	1				5			
25~26号	1		2	3	1		3	4	2	3	
27号		1									
28号			3	3	3			5		2	
29号	5	1	2	8	3			1			
30号	2	2	3	3							
31号	3	1	3	2	2		1	1	1	1	
32号		1		1	1				2		
33号	1	2		2	8			3			
34号	1										
35号	4			2	2						

9 金楠台遺跡（沼沢1974）

国分谷を約4kmさかのぼった右岸、二又に分岐する地点近くに形成された舌状台地上に立地する。標高は26.5m、水田面との比高約16mをはかる。昭和48年に発掘され、加曾利EⅣ式期と称名寺式期の住居址各1軒および円形ピット8基が発見された。このうち加曾利EⅣ式期の2号住居址は出入口と考えられた特異な張り出しのある構造上注目されるものであった。

人工遺物は土器、石器、土製品である。土器は加曾利E終末期を中心とし称名寺式、堀の内式が認められた。石器は報告者の指摘される通り、この地域の遺跡としてはきわめて多く、打製石斧19、磨製石斧3、凹石3、石皿4、敲石11、磨石6、石鏃4、石錘1、搔器1、石棒片7、不明石器2など総数74点に達した。石器の組成上からみると打製石斧、敲石、磨石、石皿が多く、石鏃の少なかったことがあげられる。打製石斧では短冊形1点を除くとすべて分銅形のものである。

報告書による住居址別の出土状況は表3に示すとおりである。

表3 住居址別石器出土表

住居址	打製石斧	磨製石斧	石 鏃	凹 石	敲 石	磨 石	石 皿	軽 石	台 石	石 棒
1号地	1		2	3	2		2		1	
2号地	5				3	1	2	1	1	7

10 西山遺跡（下津谷他1970）

通称大柏谷の最奥部にあたり、その分岐する谷地川支谷の左岸に位置する。標高約25m、水田面との比高は10mをはかる。昭和44年、発掘調査が実施され阿玉台式期の住居址2軒を発掘した。

人工遺物は土器、石器、土製品である。土器はほとんど阿玉台式のものである。石器は阿玉台式期に属する好資料となりえるもので住居址内とトレンチ内のもので総数20余点出土。その内訳を示すと石鏃7、打製石斧8、磨製石斧2、石皿1、磨石2、スクレイパー1で、破損品が多かった。打製石斧は短冊形、分銅形があり、磨製石斧では乳棒状と定角式がみられる。

11 今島田遺跡（熊野1969）

大柏本谷から東に向かって分岐する柏支谷の奥部に位置する。標高20m、水田面との比高は約10mをはかる。昭和43年、発掘調査が実施され、中期の住居址（原加曾利E期、加曾利EⅠ・Ⅱ期）17軒と加曾利Ⅱ期を中心とする土壇25基が発見された。住居址群の広がりには東方にも分布することが予想され、本遺跡が小規模な地点貝塚を伴う馬蹄形ないし環状を呈する集落跡であることが判明した。

人工遺物は土器、石器が主体をなし、他に土錘や貝製品がある。石器はかなり豊富で石鏃25、磨製石斧24、打製石斧32、磨石23、凹石7、石皿5、軽石10などである。磨製石斧は大形と小形があり定角式が中心となる。打製石斧は短冊形と揆形に分けられ、分銅形のものがみられ

ない点は後期の打製石斧と大きな違いがある。石器全体からみると縄文中期の標式的な姿相と考えられるが、これらに多くの軽石や土錘を伴っていることは海岸部地域の性格を示すものであると指摘しておきたい。

12 姥山貝塚（村松他1932、J・グロート、篠遠1952）

前述した今島田遺跡の西側約500m、柏井支谷の中位に位置する。径約150mの馬蹄形貝塚を伴う遺跡である。大正15年、東京帝国大学人類学教室によってわが国最初の竪穴住居址が完掘され、以後多くの発掘がおこなわれ合計27個所の住居址や多くの埋葬人骨群などが発見されている（杉原・戸沢1971）。時期としては中期阿玉台式より晩期安行式系まで知られるが、その中心は中、後期である。

石器としては大正15年に調査したA、B地点から打製石斧13、未製品及び小破片10、磨製石斧7、凹石2、石皿2、磨石数個があり、昭和15年、同23年に調査したC、D地点からは打製石斧47、磨製石斧8、凹石8、石鏃3、石錘1などが出土している。打製石斧は破損したものが多く、短冊形、揆形、分銅形がみられ、磨製石斧には、乳棒状と定角式がある。

13 海老ヶ作貝塚（八幡・岡崎他1972）

印旛沼に注ぐ桑納川の支谷の最奥部に位置する。標高は27m、水田面との比高は約11mをはかる。貝層部は直径130mの範囲に大小五ヶ所の堆積が馬蹄状に展開している。昭和44、45年造成区内の発掘が実施され、中期勝坂式期から加曾利EⅢ式までの住居址23軒と小竪穴50余個が発見された。

人工遺物は、土器、石器、土製品、貝製品がある。土錘としての土製品は95個出土。石器は打製石斧51、磨製石斧15、石鏃19、敲石16、石皿6、石錐1、搔器3、軽石7、剥片などが出土している。なお敲石とされた石器には磨石、凹石も一括されている。石器組成からみると打製石斧が最も多く、敲石、石皿など縄文中期の一般的な様相といえる。石皿、磨製石斧などはほとんどが破損品である。

14 高根木戸遺跡（八幡他1971）

海老川本谷から東に分岐する飯山満支谷の最奥、南に突出する舌状台地に立地する。標高は27m、水田面との比高は15mをはかる。一部に削平された部分も見られるが昭和42年ほぼ全面にわたって調査された。

その結果、中期勝坂式期から加曾利EⅢ式期にいたる住居址群75軒と、小竪穴129基を発見、径約100mの範囲に住居址群が環状に分布していることが確認された。なお本遺跡では大貝塚は形成されておらず、貝層は20軒余りの住居址の覆土に小堆積が認められる程度のものであった。

人工遺物としては、土器、石器、骨角器、貝製品がある。土錘として使用された土製品は多量に出土したが骨角、貝製品は貧弱である。

石器は、打製石斧、磨製石斧、石鏃、敲石、磨石、石皿、凹石、搔器、軽石製品などであり、

一集落内における石器群のあり方を示す好資料といえる。打製石斧は短冊形が主体を占め破損品が多い。磨製石斧では、乳棒状を呈する例は少なく、多くは定角式に属するものである。石皿はすべて破損したもので、凹部は深く使用度の高かったことを示している。また量的には狩猟具としての石鏃の顕著な点が特徴として指摘されよう。報告書による住居址別の出土状況は表4に示すとおりである。

表4 住居址別石器出土表

住居址	石器	石 鏃	打製石斧	磨製石斧	敲 石	石 皿	凹 石	搔 器	軽 石
1号									
2号			2						
3号	2		1						
4号									
5号									
6号	1		1			2	1		
7号	3		3		1	1			
8号	1			2	1			1	1
9号			2						
10号	2		1	1	1				1
11号	2		2	2	3				
12号	1		2		1				6
13号	1		1		1				2
14号	3		1			2			
15号	1		2	2					
16号			1		1	1			1
17号					1				1
18号	2		1	2	1	2		1	1
19号	1		4	3	1				2
20号	3		3						2
21号			1	2					
22号	6		8	2	2			1	1
23号			1	1					
24号			2	2					
25号			3	3	1				1
26号									
27号	2			1					2
28号	1		3						1
29号	1		4		1				
30号			1	2	1				1
31号	2		3		2	1			1
32号	3		1	1			1		1
33号			1		1				1
34号			2	1	1				
35号	1		1	2					2

	石 鏟	打製石斧	磨製石斧	敲 石	石 皿	凹 石	搔 器	輕 石
36 号	1	1		1				
37 号		1	1					
38 号			2					
39 号				1				
40 号	1	2	3					1
41 号				1				1
42 号		1	1					
43 号	4	4	1	1				1
44 号	2	1	3	1				
45 号		1			1			1
46 号	5	2		3	2			
47 号	1	7		1	3			1
48 号		2	1					1
49 号								
50 号								
51 号	2	6		1				
52 号								
53 号	2	3	1					
54 号	4	2	3	3	1			
55 号	1	1		1				
56 号	1	1						
57 号	2	2	1	2				
58 号	1	2						
59 号		1						
60 号								
61 号								
62 号								
63 号								
64 号								
65 号		2		1	1			
66 号								
67 号	1			1				
68 号	1	6	3		2			2
69 号								1
70 号								
71 号		2	1					
72 号								
73 号								
74 号								
75 号								
小竖穴遺構	3	16	7	6	2			6
表 採	4	2	4					

15 高根木戸北遺跡（岡崎他1971）

高根木戸遺跡の北方約 100mに隣接し、同じく標高27m、水田との比高15mをはかる。

昭和43年、グリッド内のみ調査であったが、中期勝坂式期～加曾利EⅢ式の住居址12軒と小竪穴8基を確認した。遺構の配置からみて、東側に開口した馬蹄形の平面をもつ集落と考えられ、貝層は点在状のものであった。

人工遺物は、土器、石器、土製品がある。石器は、打製石斧24、磨製石斧6、敲石2、石皿片2、軽質製品などが出土している。住居址別の出土状態は完掘調査でなかったため不明であるが、高根木戸遺跡の様相と大差ないと考えられる。しかし石鏃の出土量は意外に少なかったといえる。

16 加曾利貝塚（武田1967）

都川の中流域より北に分岐する通称古山支谷の奥部に位置する。標高は20～34m、水田面との比高は4～18mをはかる。貝層部は径約130mをはかる北貝塚と径約70mをはかる馬蹄状の南貝塚の2つが連結している。ここで北貝塚の資料として取り上げるのは昭和37年に調査された際の報告である。発掘は東北部の2地点で行なわれ、加曾利E式、堀之内式、加曾利B式期の住居址7軒とピット遺構11基を発見している。

人工遺物としては、土器、石器、土製品、骨角器、貝製品などがある。石器は土器群の様相から中期、後期に属するものと考えられる。2地点で、打製石斧約13、磨製石斧2、石皿4、石鏃6、凹石1、敲石5、石棒2、浮子1などである。発掘調査の資料は少ないのであるが、本地点の特徴として石皿、敲石などの再生産用具が比較的まとまって出土している点をあげておきたい。

17 加曾利南貝塚（滝口・杉原他1976）

昭和39年、貝層分布の範囲を通る6本のトレンチ調査が行なわれ、トレンチ内にて、中期阿玉式期4軒、加曾利E式期4軒、後期称名寺式期2軒、堀之内式期14軒、加曾利B式期6軒、安行Ⅰ、Ⅱ式期1軒、安行Ⅲ6式期1軒など合計32軒の住居址が確認された。

人工遺物は、土器、石器、土製品、骨角牙、貝製品、などがある。石器はきわめて多く、報告書によると打製石斧36、磨製石斧23、石鏃15、磨石52、凹石47、石皿39、砥石12、多孔石8、スクレーパー8、用途不明石器158など429点が取り上げられている。時期的には後期を中心とするもので、堀之内式～加曾利B式に顕著な増加現象のあることが認められている。石器組成では石皿、磨石、凹石が特に多く、狩猟用具としての石鏃が少なかったことがあげられよう。

3 遺跡の展開と石器組成のあり方

以上のように少ない遺跡例ではあるが、石器の出土量にみる特徴について簡単に記述してきた。これらの遺跡はその形成より終末までの継続期間に、種々のあり方が認められる。それ故、石器群においては土器との共伴関係において不明な点も多いが、ここでは石器組成の変遷とそ

の特徴を指摘しておきたい。

そこで、具体例として高根木戸遺跡とその周辺にある前期遺跡をとりあげ、両時期における石器群を比べてみたい。それは海老川水系に立地する八栄北遺跡（八幡他1974）、古和田台遺跡（金子他1973）、飯山満東遺跡（野村他1975）の石器群のあり方である。なお、水系を異にする中期の海老ヶ作貝塚が北方約3 kmにある（図2）

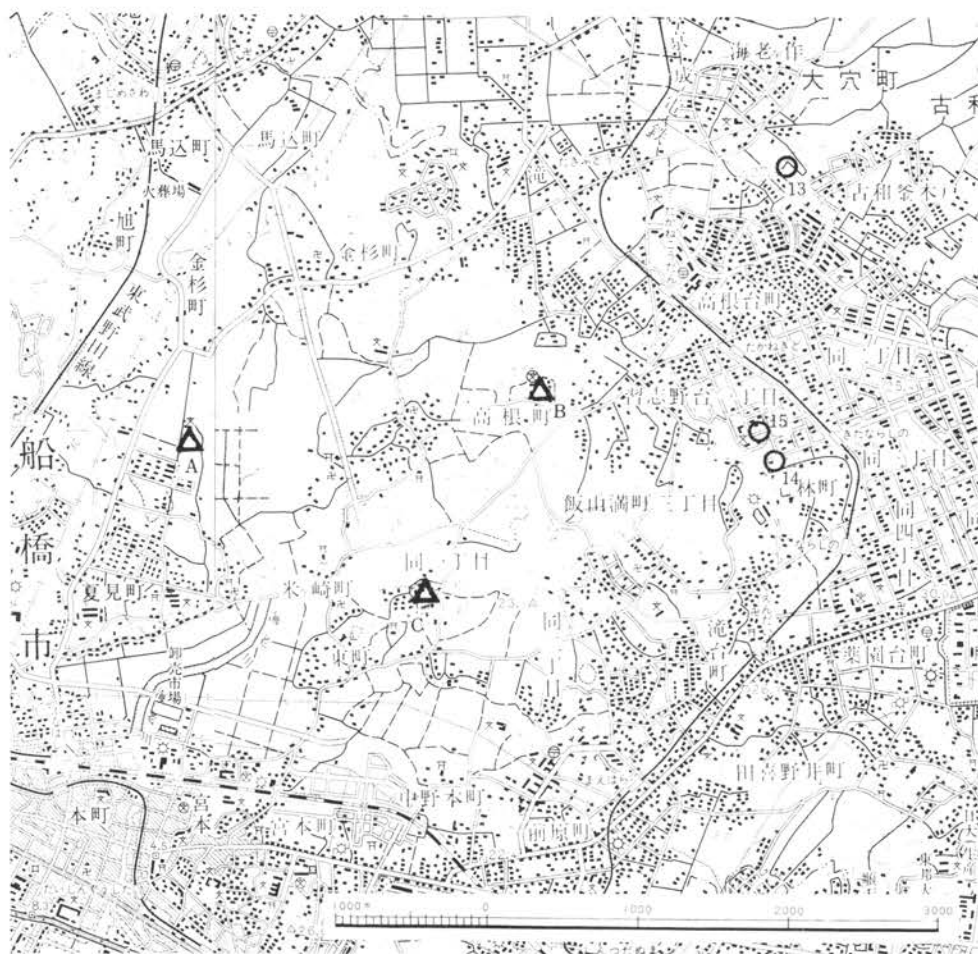


図2 高根木戸遺跡周辺の縄文前期遺跡 (1:500)

A、八栄北遺跡、B 古和田台遺跡、C 飯山満東遺跡、

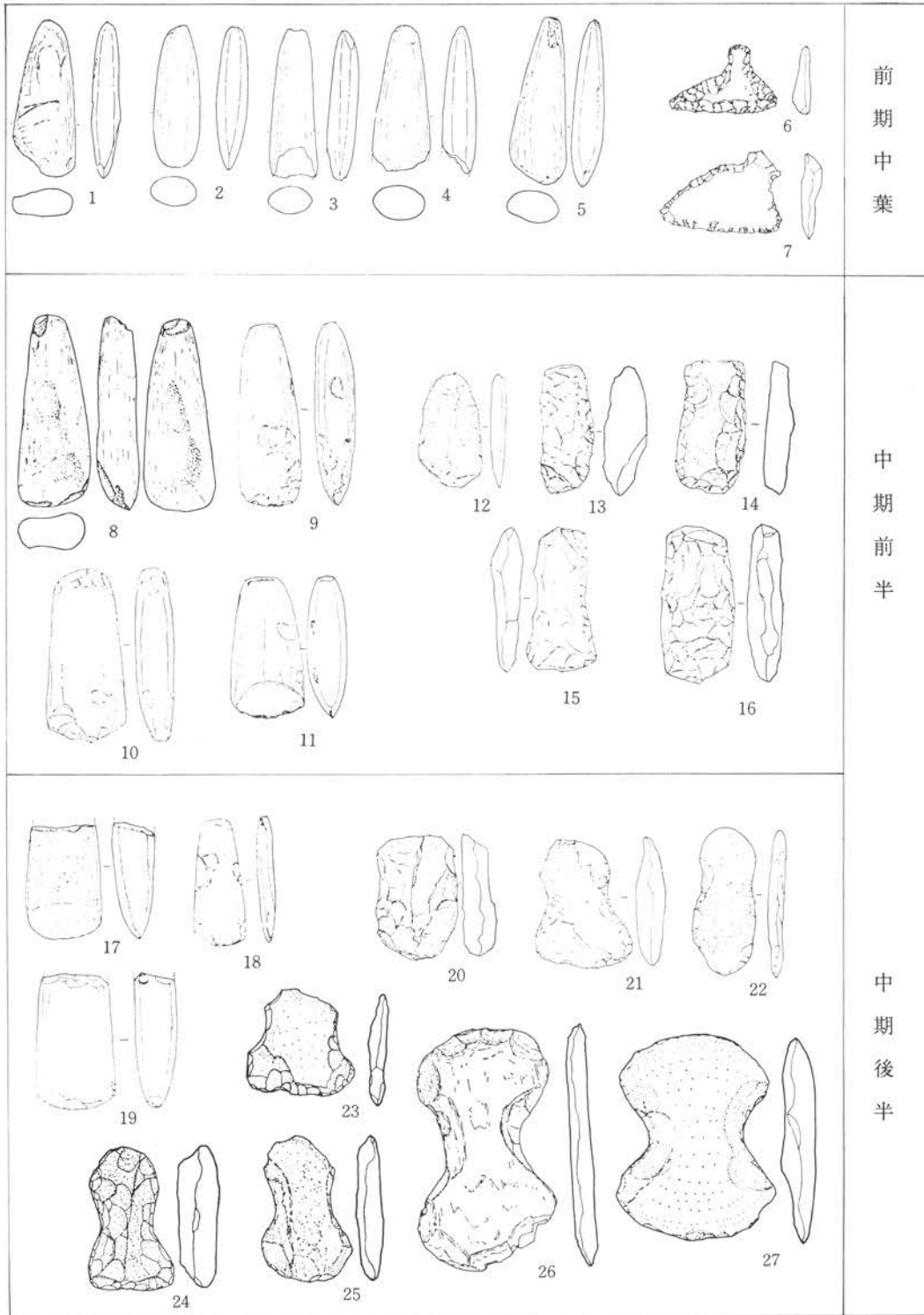


図3 打製・磨製石斧の変遷 (各報告書より転載・縮尺不同)

1～7 飯山満東遺跡、8 今島田遺跡、9～22 高根木戸遺跡、23～27 貝の花遺跡

この3遺跡は前期中葉以降、末葉の集落跡で八栄北遺跡で9軒、古和田台遺跡で10軒、飯山満東遺跡で29軒の住居址群が発見されている。石器群については前期中葉（黒浜式期）以降に定形化した形態を具備する（村田1968）ようであるが、組成上からみると大きな差異が認められる。八栄北遺跡では磨製石斧片2、打製石斧片1、礫器1、その他軽石約30と、石器はきわめて貧弱な様相を呈している。ところが古和田台遺跡では石鏃24、小形打製石斧3、石錐2、敲石、石皿各1などで石鏃重視の組成を示している。打製石斧、磨製石斧、石匙等を欠いている点に注意される。一方、飯山満東遺跡では総数300以上と石器組成は質、量とも充実している。種類としては、磨製石斧、石皿、磨石、敲石、礫器、石鏃、スクレイパー、砥石、軽石、礫、剥片などがあり、これらのうち磨製石斧、敲石、磨石、石鏃は特に豊富な出土量を示し、石鏃などは集落内でさかんに製作されたようである（古内1975）。以上の通り石器組成の状況をみると八栄北遺跡は飯山満東遺跡と比べかなり際立った差異を示していることが指摘され、古和田台遺跡では石皿、磨石などの再生産用具が貧弱であったことがかなり特異といえよう。こうしたあり方は生産活動と無関係ではなく、漁撈活動にウエイトを置いた地域という認識に立っても古和田台遺跡、飯山満東遺跡で多量に認められた石鏃は狩猟活動の活発さを示唆するものであろう。また、この時期の特徴ある石器として石匙と磨製石斧をあげることができる。飯山満東遺跡を例にとると、石匙の出土量は少なかったが、実測図にみられるように小形で、精巧な作りは中期の粗製石匙と大きな違いをみせている（図3）。

また、磨製石斧はいわゆる乳棒状石斧といわれるもので、合計15点も出土した。この石器は中期の高根木戸遺跡、海老ヶ作貝塚、今島田遺跡等にみられるが、数量は少なく、形態的には定角式が主体となっている。しかし中部山岳地方においては中期に入って著しい増加が認められており、その時期的な分布状態に地域性がみられる点は注目しなければならない。

この乳棒状石斧の機能については斧、鉞的な木材の伐採具（八幡1938・村田1970）と考えられているが飯山満東遺跡のように打製石斧を欠いている状況からみると、あるいは堀り棒の先につけた土堀具（藤森1971）としての機能も考慮する必要があるかと考えられる。

中期に入ると前期にあまりみられなかった打製石斧が爆発的に増加し、磨石、敲石、石皿等も多くなる傾向がみられる。

表5は石器の良好な資料がみられた集落跡の種別数を示したもので、貝の花貝塚を除くと、前期中葉（勝坂式、阿玉台式）に始まり末葉に終る遺跡である。

表5 遺跡別石器数

遺跡名	種別	打製	磨製	石鏃	凹石	敲磨石	石皿	軽石	搔器	石匙	石棒	石剣
今島田遺跡		32	24	25	7	23	5	10				
高根木戸遺跡		125	61	75		45	21	43	3			
海老ヶ作遺跡		51	15	19		16	6	7	3			
貝の花遺跡		200	80	15	80	250	158			2	25	32

この表でわかるように、出土量はきわめて、豊富で、打製石斧は全体の25~40%を占め、石皿、磨石なども一般的となっている。注意されるのは、高根木戸遺跡、今島田遺跡で石鏃が意外に多く出土していることである。このことは両遺跡とも大規模な貝塚を形成しておらず、きわめて規模の小さい地点貝塚しか残っていないという事実と考え合わせると興味深い。つまり、狩猟が重要な生産手段であった（八幡1971）と考えられるのである。

ところで、こうした東京湾側の遺跡群と様相を異にしているのが利根川下流域の遺跡群であろう。打製石斧では定形化したものは少なく、礫器状のものが多（西村1964）（図4）。

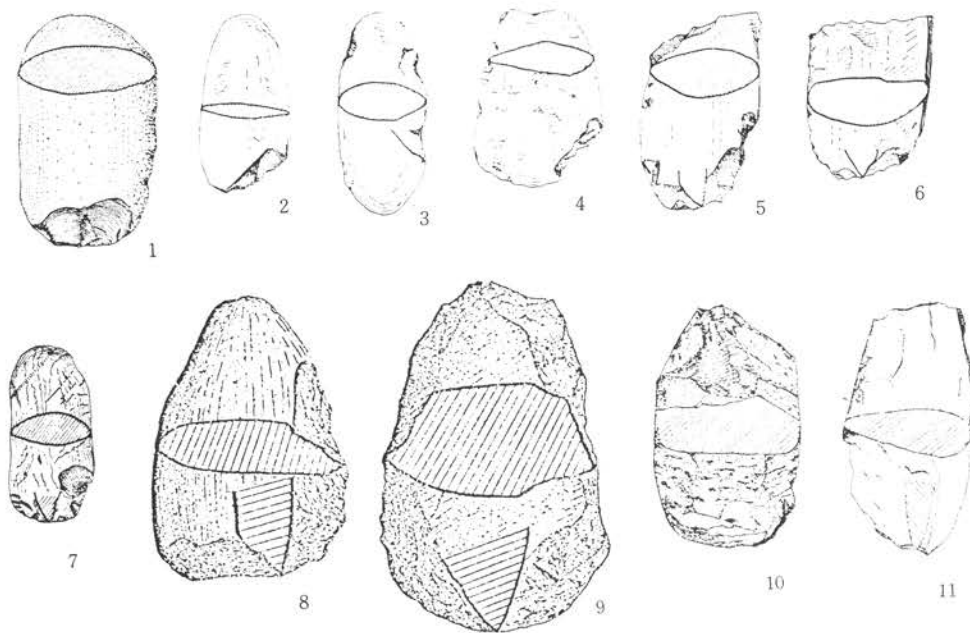


図4 縄文中期の礫器状石器（各報告書より転載一縮尺不同）

1~6 木之内明神貝塚、7 阿玉台貝塚、8・9 白井雷貝塚、10・11 三郎作貝塚、

向油田貝塚を除くと石鏃の少ない点も指摘される。しかし、漁撈具としての骨角製品は多く、やはり漁撈を主体とした生産活動と考えるべきであろうか。

中期中葉からは石器群のあり方に大きな変化と差がみられる。貝の花貝塚においては打製石斧はかなりの出土量が知られるが形態的にはほとんど分銅形に変化し、磨石、敲石、石皿などは一層量を増していったことがうかがわれる。特に、石皿と磨石のセットは製粉具（澄田1959・渡辺1975）としての用途が考えられ、植物採集活動も盛んであったことがうかがえるのである。

4 石器にみられる地域性と生産活動

縄文中期の生産用具としての石器類がどのような組成をなしていたかは、当時の遺跡から出土した石器類の実体より把握できることは言うまでもない。

千葉県においては各遺跡でそれぞれ量的な差をみい出すが、中期の著しい特徴としてあげるとすれば、打製石斧とともに敲石、磨石、石皿が多いことで、石鏃のあり方にも注目される。

生産用具としての石器類には機能的側面から考えると直接生産用具と再生産用具に大別される。前者の直接生産用具としては石鏃、打製石斧、磨製石斧、石槍等があり、後者の再生産用具は石皿、磨石、敲石、凹石、石匙等である。この分け方はすべての石器に適応されるとは考えられないが形態、機能を類推した場合、一応は可能であろう。この区分に従って中期の石器群の組成を考えてみると、一層その性格が明瞭となろう。

直接生産用具として増加したものは打製石斧がある。打製石斧は短冊形、揆形、分銅形の三種に大別されるが中期中葉頃までは短冊形が主体を占めていたようである。その用途は一般に土掘り具が考えられ、一説には竪穴の掘り具とする考えもあるが、それだけでなく球根類などの植物採集に大きな使用度がおかれていたと考えられる。

再生産用具には敲石、磨石、石皿の増加が認められる。この種の石器は近年、渡辺誠氏が論じられるように、ドングリ、トチなどの堅果類の製粉具（渡辺1975）と考えられ、やはり植物質資源の開拓を示す資料といえる。最近調査された中期末の集落跡、千葉市僧御堂遺跡では出土総数 468点のうち磨石 116、凹石42、石皿33の石器が発掘された（注1）。本遺跡は貝塚を伴わないその生産活動が注目され、高根木戸遺跡、あるいは貝の花遺跡等にもみる集落の発展は漁撈活動だけに依存していたのではなく、植物採集がその重要な要素となっていたものと考えられる。

それでは、貝塚地域とは異った立地環境にある内陸部の遺跡群とどのような相違がみられるのであろうか。

まず武蔵野台地に立地する小金井市栗山遺跡（土井他1975）と貫井南遺跡（安孫子他1974）の石器群のあり方をみてみよう。

栗山遺跡では中期勝坂式期の住居址2軒が調査され打製石斧 197、磨製石斧4、石鏃2、磨石・凹石15、石皿2、砥石4、礫器5、刃器状石斧41などが出土した。貫井南遺跡では勝坂式期の住居地14軒と加曾利E式期の住居址3軒が確認され、打製石斧1981、磨製石斧10、石鏃51、磨石 159、凹石12、石皿5、石匙7、礫など総数23,984にも達する膨大な石器が出土した。この両遺跡の石器中、目立って多量に出土したものは打製石斧であり、反対に石鏃は極端に少なかった。再生産用具では磨石、凹石がやや多く植物採集にウエイトをおく中期の様相を示しているといえる。

次に八ヶ岳山麓地帯の諸例は藤森栄一氏によって分析され、「打製石斧、凹石の多数と、大形粗

製石匙、石皿、乳棒状石斧などの生産用具から成立している」（藤森1965）ことが指摘されている。石器群の増加は前期末に現われ、中期中葉の勝坂式期に併行する新道期から井戸尻期に急激な増加を示す。例えば、藤内遺跡（宮坂他1965）では、この期に属する7軒の住居址から総数94点の打製石斧が検出されている。また、九兵衛尾根遺跡（宮坂1965）では7軒の住居址から打製石斧118と凹石32などが検出されている。縄文時代を通じて最も多量に打製石斧をはじめ、凹石、石皿等が出土しているのである。

以上は、内陸部遺跡の石器の出土量に関する状態であるが、石器組成は千葉県の遺跡においても基本的には同様である。しかし出土量については著しい差異が認められる。打製石斧に関する限り圧倒的に内陸部の方が量的に卓越しており、植物採集を中心とするめぐまれた生活環境をもつ社会であったことが考えられる。但し、石鏃については海岸部の遺跡で比較的多く出土している例があり興味深い点といえる。

おわりに

縄文時代の生産活動の復元には生産用具としての石器類の分析が必要である。この観点に立ち、千葉県の主要遺跡から出土した石器類について概観し、石器組成にみられる生産活動がどのようなものであったか考えてみた。

まず、石器の出土状態からは各地域、更に各遺跡で量的な差がみられたが中期の特徴として打製石斧、敲石、磨石、石皿の多いことが認められた。次に、このような石器組成が示す生産活動については、そこに植物採集活動の発展を考えてみた。

以上、極めて不十分な資料から主観的な考えを述べたので大きな誤りをおかしているものと思われる。特に資料の集成に関して十分な配慮がなかったことは、不勉強によるものと悔まれる。今後は、更に資料の充実をはかり基礎的な分析を継続していきたいと考えている。

小論をまとめるにあたっては、先学の研究成果を参照し、文化財センターの齊木勝氏には多数の教示を頂いた。

注1 齊木勝氏の御教示による。

引用文献

- 安孫子昭二、小田静夫他、1974『貫井南』小金井市貫井南遺跡調査報告
江森正義、戸田哲也、藤下昌信1973『成田市中囲護台遺跡調査報告』
岡崎文喜他、1971『高根木戸北』船橋市教育委員会
金子浩昌、1959「石器時代の漁撈活動」『千葉県石器時代地名表』千葉県教育委員会
金子浩昌、土肥孝、金刺伸吾1973『古和田台遺跡』船橋市教育委員会
熊野正也、1969『今島田遺跡』市川市文化財調査報告1
桑原護他、1974『飯重』佐倉市教育委員会
齊木勝、1974「千葉県向油田貝塚出土の石器」古代57

- 下津谷達男、戸辺慶成、中山吉秀1970『西山遺跡』鎌ヶ谷町史資料集6
J. グロート、篠遠喜彦1952『姥山貝塚』
- 杉原莊介、戸沢充則1971「貝塚文化」『市川市史』第1巻
- 澄田正一、1959「濃飛山地に出土する石皿の考古学的研究」『名古屋大学文学部十周年記念論集』所収
- 武田宗久、1967『加曾利貝塚 I - 昭和37年度加曾利北貝塚調査報告』千葉県教育委員会
- 滝口 宏、杉原莊介他、1976『加曾利南貝塚』
- 土井義夫、肥留間博他、1975『栗山』小金井市文化財調査報告書4
- 西村正衛、1954「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚」(第2、3次調査)早稲田大学教育学部学術研究3
- 西村正衛、1952「千葉県香取郡八都村向油田貝塚発掘概報」古代7、8合併号
- 西村正衛、1970「千葉県小見川町阿玉台貝塚 - 東部関東における縄文中、後期文化の研究その二」早稲田大学教育学部学術研究19
- 西村正衛、1969「千葉県小見川町木之内明神貝塚 - 東部関東における縄文中、後期文化の研究その一」早稲田大学教育学部学術研究18
- 西村正衛、1971「千葉県佐原市三郎作貝塚 - 東部関東における縄文中、後期文化の研究その三」早稲田大学教育学部学術研究20
- 西村正衛、1964「縄文文化地域研究の基礎的概念」早稲田大学教育学部学術研究
- 沼沢 豊、1975『松戸市 金楠台遺跡』千葉県都市公社
- 野村幸希他、1975『飯山満東遺跡』千葉県都市公社
- 藤森栄一、1950「日本原始陸耕の諸問題」歴史評論第4巻4号
- 藤森栄一、1971「乳棒状石斧論」『一志茂樹博士喜寿記念論文集』所収
- 藤森栄一、1965「生産用具としての石器」『井戸尻』所収
- 古内 茂、1975「石器」『飯山満東遺跡』所収
- 宮坂英式他、1965「鳥帽子・九兵衛尾根遺跡」『井戸尻』所収
- 村田文夫、1968「関東地方における縄文前期の竪穴住居と集落について」歴史教育第16巻4号
- 村田文夫、1970「関東地方における縄文前後半期の生産活動について」古代文化22-4
- 松村 暁、八幡一郎、小金井良精、1932『下総姥山に於ける石器時代遺跡 - 貝塚ト其ノ貝層下発見ノ住居址』東京大学人類学教室研究報告5
- 八幡一郎、岡崎文喜他、1972『海老ヶ作貝塚』千葉県教育委員会
- 八幡一郎、岩崎卓也他、1973『貝の花貝塚』松戸市教育委員会
- 八幡一郎、新津健他、1974『八栄北』船橋市教育委員会
- 八幡一郎、西野 元、岡崎文喜他、1971『高根木戸』船橋市教育委員会
- 八幡一郎、1938「日本の乳棒状石斧」人類学雑誌53巻5号
- 渡辺 誠、1975『縄文時代の植物食』